れきしのおと
～後北条ものがたり～

過去の記録・記憶をお届けする「れきしのおと」第４号を刊行します。
歴史に触れ、歴史を感じ、これからの未来に役立つヒントになれば幸いです。第４号では戦乱の戦国時代の中で五代も続いた後北条氏について取り上げてみたいと思います。

現在の小田原城

北条早雲について

北条早雲は、戦国時代の先駆者として有名です。通説では一介の素浪人から身を起こして、たちまち伊豆・相模をのっとった風雲児と言われていました。しかも、つい最近まではその詳しい前歴は不明な事が多かったのですが、早雲の実像を解明しようとする研究者達の精力的な研究活動によって、その実像がかなり明確になってきました。

↓北条早雲像↓

（箱根町 早雲寺蔵／写真提供 箱根町教育委員会）

北条早雲の名前

そもそも、北条早雲と言う名前は本人が名乗ったのではなく、江戸時代初期から言われている俗名です。実名は伊勢新九郎（いせしんくろう）で、後に仏門に入って伊勢宗瑞（いせそうずい）（伊勢早雲庵宗瑞（いせそううんあんそうずい））と名乗った人物であったことは、『伊勢系図（いせけいず）』や『太閤記（たいこうき）』などで早くから知られていました。

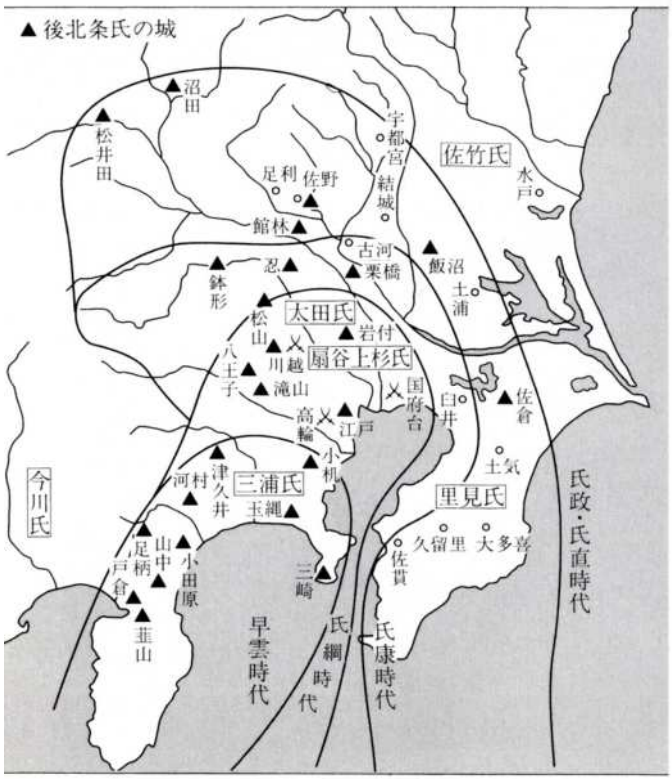
北条早雲の実像

研究成果によれば、北条早雲の出身は備中国（現在の岡山県）で、伊勢盛定の次男、伊勢盛時であることがわかりました。当時の伊勢氏は室町幕府の政所執事（幕府の政務機関である政所の長）を世襲していた大変な名門の出身であったことが判明しました。

北条氏の綾瀬支配

その後、早雲は駿河国（現在の静岡県の一部）の守護今川氏に仕え、伊豆に侵攻し、更に相模国とその周辺も侵攻していきます。そして１５１０年代、鎌倉制圧の時点をもって、綾瀬市域の郷村は北条氏の支配下となり、以後、１５９０年までは北条氏の支配が続くことになります。

↓後北条氏五代勢力範囲図↓



早雲、氏綱、氏康、氏政・氏直と勢力が広がっている
（綾瀬市史６より転載）

綾瀬市域の戦国領主たち

ここで、戦国時代の綾瀬市内では誰が支配していたのかを北条氏康の家臣団の記録である『北条氏所領役帳』に記載のある地域についてまとめてみました。

・吉岡地域：岡本八郎左衛門政秀

岡本氏は御馬廻衆に属し、正月の松飾り奉行などを務める中堅の武士です。政秀はその後城普請（お城の整備工事）や、合戦による功績を認められ、吉岡地域を中心とした大きな所領を与えられ、その支配は１５９０年の北条氏滅亡まで続きます。

・寺尾地域：後藤氏と長田氏

まず、寺尾領主として、『北条氏所領役帳』に「一、　弐拾貫文　東郡寺尾　後藤彦三郎」と記されていることから、後藤彦三郎が領主として見えてきます。

後藤彦三郎は、小田原衆に属する侍で、渋谷氏の一族と言われています。鎌倉時代に渋谷一族が鹿児島へ転出した際に寺尾に残って開発領主となり、戦国時代に北条氏の家臣となったとおもわれます。なお、『新編相模国風土記稿』の寺尾村の記載によれば、寺尾にある報恩寺は後に土着した後藤氏の一族である、後藤右近の開基といわれています。

寺尾にはもう一人領主として長田氏がいます。御馬廻衆に属する長田但馬守です。長田氏は寺尾だけでなく綾瀬市域外にも所領がありました。また、寺尾の所領も元は富永康景の所領を与えられたものであることが『北条氏所領役帳』よりわかります。

・**小園地域**：高城氏から金子氏へ

　こちらも『北条氏所領役帳』によると「拾貫文　東郡小薗　高城（胤辰）」と簡単な記載により、領主は下総小金城（現在の千葉）の城主、高城胤辰であることがわかります。しかし、実際の支配は家臣である、金子兵部丞輔、与次郎親子であることが、１５８７年の『高城胤則判物』の記述よりわかります。

　金子氏が小園の地付き領主として早くより支配し、高城氏を通じて、北条氏の支配が小園へ直接及んだことが『高城胤辰※官途状』や『北条家朱印状』からわかります。

（※官途状・・・金子氏が主君の高城氏から兵部少輔と言う武家の位をもらったときの申渡状）

↓1587 年 北条家朱印状（右は虎朱印「禄寿應隠」部分）↓

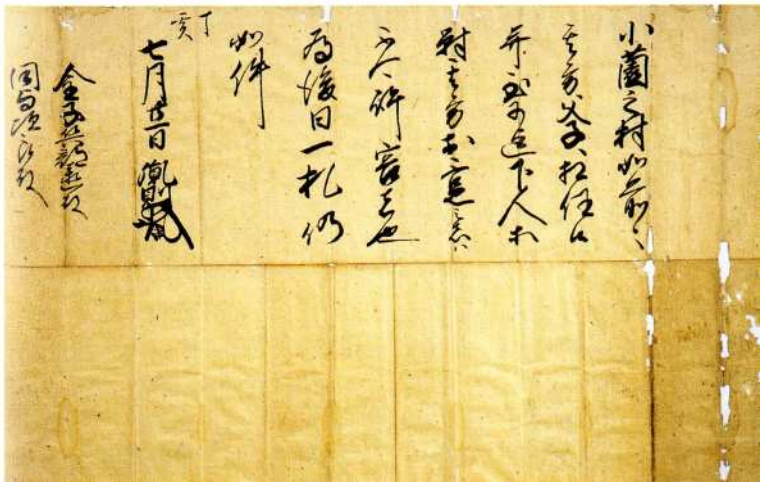
北条氏直が、小園に竹を６束分刈り取り、馬を使って相模川まで運び、舟で須賀(現在の平塚)まで運ぶようにと命じたことが記されている。

海老名市教育委員会寄託（金子文書）

↓1581 年 高城胤辰官途状↓

海老名市教育委員会寄託（金子文書）

↓1587 年 高城胤則判物（小園、金子と文字が確認できる）↓



海老名市教育委員会寄託（金子文書）

・上土棚地域：埒和又太郎

埒和氏は美作国(現在の岡山県)出身で、松山城（埼玉県東松山市）に所属していました。早雲の時代から北条氏に仕える重臣であり、土棚（綾瀬市上土棚、藤沢市下土棚）だけではなく小沢（川崎市多摩区）、沼部（伊勢原市沼目）、福田（大和市福田）や上野国（群馬県南部）などとても広大な所領を支配していました。さらに『北条氏所領役帳』には税である段銭・棟別銭が免除となっており、埒和氏が北条氏から優遇されていたことがうかがえます。

戦国時代の終焉

早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直と五代続き、ほぼ関東一円を手中に治めた北条氏ですが、激動の戦国時代の大きな波に飲み込まれることになります。

室町幕府を滅ぼし、戦国の乱世に終焉（しゅうえん）の道筋をつけた織田信長が台頭しますが、１５８２年、家臣の明智光秀に本能寺で滅ぼされると、その後継者として突然豊臣秀吉が歴史の舞台に登場してきます。これら中央政治の動きは関東へ少しずつ影響して来ることになります。

１５８９年になると、九州や四国平定を成し遂げた豊臣秀吉が関東へ侵攻してきます。

豊臣氏との戦に備えて綾瀬市域の侍や農兵たちの多くは、玉縄城（現在の鎌倉市玉縄）の城主である北条氏勝の配下として、山中城（現在の静岡県三島市）に籠城しました。御馬廻衆の岡本氏や後藤氏は小田原城に籠城したと思われます。

北条氏の滅亡

しかし、合戦が始まると七万人の大軍に攻められ奮闘むなしく、山中城は半日で落城してしまい、玉縄城に逃げ帰ってしまいました。

その後戦いは豊臣群の圧倒的な兵力の差により、玉縄城は徳川家康に降伏して開城し、残る最後の小田原城も氏政、氏直親子が降伏し開城しました。

ここに、百年におよぶ戦国乱世の世はようやく終わり、豊臣時代を経て、平和な江戸時代を迎えていきます。

生涯学習課では、綾瀬市の歴史に関する資料を収集しています。今回の内容を詳しく知りたい方は綾瀬市史６「中世・近世」編や市史１０「写真で見るあやせ」をご覧ください。興味のある方は下記までお問合せください。

れきしのおと　第４号　平成 29 年 3 月 31 日
※転載禁止
編集・発行　綾瀬市教育委員会 生涯学習課 市史文化財担当　TEL0467-70-5637